

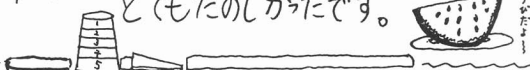
ここに、この単元を終えてからの、児童の感想をあげて、研究のまとめとする。

うまくなったぞ！

・6時間の学習で、みんなと〜ってもじょうずになりましたね。グループでなかよく教え合いをした人や、とび箱やマットの出し入れをいっしょうけんめいやってくれた人も多かったです。いろいろな感そうを自由にできるだけたくさん書いてみよう。

名前(N 子)

よし、がんばるぞ」という気持ちでせんかしたら、かいきやくとびや、てきながったわざ、かてできるようになりました。そく転は、また「できないので」今度かんはってみたいです。とくに、5・6時間目は、自分のはんの友だちにおしえてあげたり、「やった」「スッコとした」などさわやかな気持ちをあしわえました。かかえこみとびかてできたときは、とてもうれしかたです。水んそくわざは、よこころかりから、まえへいくにはとくうす水ばいいか、かんがえました。自分の友だちが私にいろいろおしえてくれたりして、いろいろなことをまなびました。やった、水んしゅうしたりするのかがとてもたのしかたです。



〈参考文献〉

- ・小学校学習指導要領（文部省）
- ・小学校指導書 体育編（文部省）
- ・よい体育授業の構図；高田典衛著（大修館書店）
- ・個性を生かす学ばせ方；辰野千寿著（図書文化社）
- ・学校体育「楽しい体育の学習カードモデル集」（日本体育社）

【授業者の感想】

福島市立平野小学校 教諭 泉 光

「基礎・基本の定着と個性の伸長」に関する研究の協力委員として、わずか1学期間ではあったが、体育科の検証授業をさせていただく機会に恵まれた。

本研究は、教科の基礎的・基本的な内容の定着のみならず、児童一人一人の「よさ」の伸長も相互に図っていくという、教育の本質にせまる素晴らしい研究であった。

今までの自分の授業を振り返ってみると、いかにできるようにさせるかということに主眼がおかれ、児童は、あやつり人形のように指示にしたがっている場合が多かった。体育の不得意な児童にとって、この上ない苦痛を感じさせることになっていただろう。しかし、本実践が進むにしたがって、不得意な児童からも、「次はこの技ができるようになりたい」という、意欲的な感想が聞かれるようになってきた。それは、自分のできる技を組み合わせる自由運動に取り組む中で、器械運動の楽しさを味わうことができたためであり、より高次の運動への意欲の喚起につながったのだろう。

意欲の喚起という点では、どの児童にも「よさ」を意識させる学習カードによる自己評価や相互評価の場を設定したことの効果も大きい。自己中心的な児童も、お互いを認める心が育ち始めるとともに、友達の意見を素直に聞いたり、どうすればできるようにさせられるかということを真剣に考えたりするようになってきた。こういったことが、ジェクタビリティの刺激による相互伸長のひとつであることを改めて理解することができた。

教職経験10年目を迎えながら、日々の忙しさに追われ、授業は授業、生徒指導は生徒指導と、切り離した見方しかできなかった自分にとって、授業の中にこそ存在感や成就感を味わわせるなど、生徒指導の機能を高める必要性を感じた。またセンターの先生方の諸調査に基づく児童理解の深さや、授業の組立てのユニークさにも驚かされた。

この研究の教訓を生かし、今後は一層精進したいと思う。